

# 青年陳独秀の世界認識形成に関する一考察

—『小学万国地理新編』を通して—

亀 井 拓

Formation of the World View of Young Chen Duxiu:  
Centering upon *Xiaoxue Wanguo Dili Xinbian*

KAMEI Taku

## Abstract

This short paper delves into one of the sources that reveal Chen Duxiu's (1879–1942) world view. *Xiaoxue Wanguo Dili Xinbian* was published as a geographical textbook used in elementary schools, and it was also one of Chen's earliest writings, finished in 1902. For Chen, geography, especially human geography (political geography) in Japan and China, meant not only knowledge of foreign countries and of the relationships between human beings and nature, but also as a means to teach native people about national crises and Western invasion. Since this book is written rather than translated by Chen Duxiu, many of his own ideas are visible therein. What kind of geographical knowledge did Chen choose to accept? Where did it come from? How did he delineate the world with the knowledge? These questions are important and, arguably, serve as the key to Chen Duxiu's later thought.

**Key Words:** 陳独秀、『小学万国地理新編』、地理、文明論、人種論

## はじめに

アヘン戦争以降、欧米諸国の中国進出は急速に進展したが、一部の知識人を除いて西洋に対する危機感はまだ薄かった。1895年の日清戦争敗北は清末の知識人に大きな衝撃を与えると同時に、短期間で国力を増強させた日本に対する注目を高め、1896年、13人の留学生が日本へ派遣された。日本に倣った改革を提唱した康有為（1858-1927）、譚嗣同（1865-1898）、梁啓超（1873-1929）などの変法派は1898年に失脚したが、その後を継いだ張之洞（1837-1909）、劉坤一（1830-1902）ら洋務派の強い後押しのもとで本格的な日本留学が始まり、中央も日本留学を官僚になるための重要な条件として採用した。

実藤恵秀氏の『中国人日本留学史』<sup>1)</sup>が明らかにしているとおり、1900年代に日本留学が一大ブームとなり、留学生は嘉納治五郎（1860-1938）の学校（のち「亦楽書院」、「弘文書院」）や各学校の速成班などで教育を受け、そのまま日本の大学に進学したり、帰国して官僚や教員になったりした。同時に留学生は、日本滞在中に多くの日本書や西洋書を中国語に訳すことで、中国国内に最新の西洋思想を紹介した。1900年に東京で設立された訳書彙編社はその最初のもので、初代社長の戢翼翬（1878-1908）は、最初の日本留学生の一人であり、のちに彼は日本に留まって翻訳と出版を手掛ける一方、押し寄せる留学生の世話も行った。

このような背景の中で、陳独秀（1879-1942）は1901年、23歳のときに日本へ留学した。彼は1901年4月に出版された『勸学譯編』の安慶代理販売所の代理販売員であり、この『勸学譯編』は訳書彙編社とつながりをもっていたことから、彼の日本留学はこのコネクションを利用したと考えられる<sup>2)</sup>。彼は1897年に科举によって立身出世することを放棄して以降、いわゆる康梁派を支持していたようだが<sup>3)</sup>、体系的に新式教育を受けることはなかったため、日本で受けたインパクトはかなりのものであったと予想される。数度の日本留学や滞在を経て、彼は語学や西洋思想を学び、それを基礎に1910年代には新文化運動の思想的指導者として、また1920年代には中国共産党の初代指導者として活躍し、中国近現代史において欠くことのできない人物になっていった。

彼の思想形成やその後の言説は、中国より一足早く西洋化を始めた日本の直接的・間接的影響を多方面から受けた<sup>4)</sup>。彼の最初の日本留学は一般に1901年10月から1902年3月までの約半年間といわれているが<sup>5)</sup>、彼はその1902年に『小学万国地理新編』（以下『万国地理』）という西洋

1) さねとうけいしゅう『清国人日本留学史』増補版（くろしお出版、1981年10月）。

2) 鄧国義「陳独秀早年事蹟の新資料」『近代史研究』2003年第2期。

3) 傳記文学雑誌社（編）、陳独秀（著）『實庵自伝』（傳記文学雑誌社、1967年9月）p.43や陳独秀「孔子之道與現代生活」『新青年』第二巻第四号、1916年12月など参照。

4) 唐宝林「陳独秀与日本」『百年潮』2007年第1期。

5) 汪希顔が汪孟鄒に宛てた手紙から、3月13日以前に南京で陳独秀と汪希顔が会っていたことが分かる（唐

の地理学をベースとした地理教科書を、上海商務印書館から出版した。この時期に地理知識を紹介する書物を出版したこと自体、彼が西洋学問の中で地理学に強い関心を示していたことの表われであり、その内容はのちに説明する通り、日本の地理学と思想潮流の影響を受けたものであった。

## 一、陳独秀に関する先行研究と問題意識

陳独秀の青年期については、史料が限られていることなどが原因で未詳な点が多い。彼の青年期に関する研究として、陳萬雄氏の『新文化運動前的陳独秀』（1979）<sup>6)</sup>が最も早い著作のひとつであり、その中でも『万国地理』は紹介されている。しかし具体的な内容や書かれた経緯などは論じられておらず、その存在が知られるにすぎなかった。陳独秀に関する比較的新しい著作である任建樹氏の『陳独秀大伝』（2012）<sup>7)</sup>においても、書名と出版年が紹介されるだけであり、他の論者の論述を含めて、この本が具体的にどのような内容で、いかに西洋学問を紹介し、日本の影響をどの程度受けたのかについて論じたものは皆無である。

これまでの陳独秀研究は、大きく①いわゆる中国共産党史観の影響を強く受けた研究、②中国政治史と彼の業績の関連についての研究、③彼の晩年に重点を置く研究、の三つに集約することが出来る。

①は、張畢来氏<sup>8)</sup>や鄭野氏<sup>9)</sup>などのように、陳独秀のマルクス主義受容度・理解度と彼の共産主義運動との関連を研究するものである。つまり彼がどのようにマルクス主義を受け入れ、なぜ中国共産党の創設者の一人でありながら、その後自ら党と距離を置いたのかを問題意識にした研究である。

②は、中国共産党史観の弊害に対する反省から、より広い視点として中国政治史の文脈から陳独秀を捉えなおそうとする研究である。横山宏章氏<sup>10)</sup>や先に挙げた任建樹氏<sup>11)</sup>は、中国近現

---

宝林、林茂生『陳独秀年譜』（上海人民出版社、1988年12月）p.20）。当時の東京朝日新聞の汽船出帆に関する広告から分析すれば、横浜から上海まで早くておよそ8日かかっていた。また1903年に中国上海を訪問した嘉納治五郎は、8月25日22時に乗船し、翌日夜に南京に着いている（老谷生「嘉納会長清国巡遊記」『国土』第五十二号（1903年1月20日）（本の友社、1984年12月））。これらの点を踏まえれば、陳独秀が3月13日以前に南京に着くための一番遅い便は、2月27日に横浜を出港した「神戸丸」であり、各港では逗留時間・天候によって到着日は前後したが、早くて3月7日ごろに上海に着いたと思われる。そのため実際には2月中に彼は東京を離れていた。

6) 陳萬雄『新文化運動前的陳独秀』（中文大学出版社、1979年）。

7) 任建樹『陳独秀大伝』第3版（上海人民出版社、2012年2月）。

8) 張卒来「“五四”時期陳独秀思想的特徴」『光明日報』1955年6月7日。

9) 鄭野「試論五四後期陳独秀世界觀的轉變」、王樹棟、強重華、楊淑娟、李学文（編）『陳独秀評論選編』上冊（河南人民出版社、1982年8月）。

10) 横山宏章『陳独秀』（朝日新聞社、1983年5月）。

11) 任（2012）。

代史全体に目を向けて、その中で彼が果たした役割を再評価したものであり、主に彼の政治思想と中国革命の関連を問題の中心に据えている。

③は、唐宝林氏<sup>12)</sup>や江田憲治氏<sup>13)</sup>のように、陳独秀は資本主義に反対するマルクス主義者であり続けながら、中国共産党や他のマルクス主義団体の抱えた問題を指摘したとする研究である。このような研究傾向は、必ずしも党史を唯一の正統的な歴史としない点で①とは根本的に異なっている。そしてこのような研究は往々にして、陳独秀が当時において見出した欠陥を、今日における中国の諸問題を考える上で活用・再検討しようとする傾向がある。袁偉時氏<sup>14)</sup>は、民主政治や自由などという陳独秀の貫いた信念が、建国後の中国においてどのように展開したかを論じており、また毛沢東研究の大家である李銳氏は、2012年秋に行われた第18次全国代表大会において、中国共産党内の民主化改革を推進しようと主張する文脈の中で、陳独秀の晩年を再評価する書面を発表した<sup>15)</sup>。

以上が陳独秀研究の概括であるが、これまでの研究は中国共産党や中国政治史、中国革命などとの関係に重点を置き、彼の政治思想を明らかにすることが意図された。そのため革命運動や政治運動との関わりが比較的低いと目された事象が詳しく分析されることは少なく、単なる地理教科書である『万国地理』についてもこれまであまり重視されてこなかった。

筆者は以前、これまであまり注目されてこなかった陳独秀の一面に注目し、彼の優生思想の影響について考察した<sup>16)</sup>。彼は政治革命のための思想革命を提唱していた時期に、優生学に基づいた人種改良を選択のひとつとしていたが、このような政治革命や人種改良の必要性は、中国が欧米列強に比べて遅れをとっていると彼が考えていたためであり、その危機感が彼に強烈な救国意識を生じさせたのであった。そのため筆者は、彼の世界認識とその変転についても論じた<sup>17)</sup>。しかし彼の世界認識はどのように吸収・形成されたのかについて論じるまでには到らなかった。

そこで本稿では、この未解決の問題を解く一方法として『万国地理』に注目する。本書は次節で説明するとおり、非常に簡単にまとめられた西洋学問を取り入れた総合的な地理教科書で、地球や世界各国の姿や様子を分かりやすく紹介したものであった。

12) 唐宝林『中国托派史』(東大図書公司、1994年)。

13) 江田憲治「陳独秀の「最後の見解」をめぐって」『社会システム研究』第10号(京都大学大学院人間・環境学研究科、2007年2月)。

14) 袁偉時「従陳独秀到顧准和李慎之」『二十一世紀』ネット版、2003年7月号。

15) 「李銳在十八大列席代表第五組の書面發言」。

[http://www.199.com/EditText\\_view.action?textId=638232](http://www.199.com/EditText_view.action?textId=638232)

(更新日：2013年3月4日。閲覧日：2013年7月10日)

16) 拙稿「20世紀初期における陳独秀の救国意識と優生学の傾向」『史泉』第117号(関西大学史学・地理学会、2013年1月)。

17) 拙稿「陳独秀の世界認識——1900～1926年を中心に——」『東アジア文化交渉研究』第6号(関西大学大学院東アジア文化研究科、2013年3月)。

ヨーロッパで蓄積された地理に関する知識や情報は、すでに中国の明代や日本の江戸時代には一部の知識人に影響を与えていたが、それが地理認識・世界認識の主流になることはなかった。ところが日本の幕末や中国の清末以降、ヨーロッパの地理知識や情報は自国を世界の一部と位置付けるとともに、それまでの閉鎖性を打破し、欧米諸国に比べて自国が劣っていることを警告するものとして活用された。つまり欧米諸国を軍事的・政治的・経済的・文化的脅威として認識していた当時の日中において、西洋からもたらされた近代学問のひとつであった地理知識の吸収は、世界にどのような国があり、人々がどのように暮らしているのかを知るためだけではなく、それまでの世界観・価値観を打ち破り、自国が危機的状況にあることを証明することで、改革を促す側面を内包していた。

1900年代のオピニオンリーダーとして活躍した梁啓超ですら、1890年に世界地理志『瀛環志略』（1849）を読んで初めて世界に五大洲があることを知り<sup>18)</sup>、ようやく中国を世界の中で相対化することが出来たのである。また多くの留学生を教育した弘文学院（1902年開校）でも、留学生らに清国の客観的状況や国際情勢を理解させることに重きが置かれていた<sup>19)</sup>。このように世界地理の情報は、新学を修め、改革を目指す人が最初の一步を踏み出すための知識・教養であり、それまでの価値観を根本から再構築させるものでもあったのだ。

陳独秀も日清戦争や義和団の乱の結果によって初めて世界を知り、中国が世界に存在する多数の国家のひとつであり、世界と国家、国家と個人との間には深い関係がある点に気づいて冷や汗をかいたと述べているが<sup>20)</sup>、そんな彼が初めての日本留学を終えて帰国した1902年に、出版したのが、『小学万国地理新編』という地理の教科書だった。つまり陳独秀も単に総合的な地理知識を普及させることだけを意図して本教科書を書いたのではなく、その背後に中華思想という独善的な世界認識や、中国人の世界に対する無理解などを打破しようとする目論見が見られるのである。そして世界認識の転換は同時に彼自身が救国意識を抱くきっかけであり、その経験を読み手にも与えようとしたのである。

加えて、本教科書は特定の本を訳したのではなく、陳独秀が自身で編輯したものであった。つまりこのテキストから具体的にどの影響を受けたのか分析することはできないが、彼が当時どのように世界を把握し、何を伝えようとしたのかを見ることは可能であると考えられる。この分析を通して、青年期の彼の救国意識と世界認識のつながりの一部分を見出し、彼の世界認識の来源や着眼点、注目点を知る手がかりにしたい。なお筆者は『万国地理』の下巻が未見であるため、本稿は『万国地理』の上巻（袋綴じ本で34ページ分）に限定して見ていく。

18) 梁啓超「三十自述」『飲冰室合集』文集之十一（中華書局、1989年3月）p.16参照。

19) 生誕一五〇周年記念出版委員会（編）『気概と行動の教育者 嘉納治五郎』（筑波大学出版会、2011年5月）p.147-148参照。

20) 三愛（陳独秀）「説国家」『安徽俗話報』5、1904年5月1日。

## 二、『小学万国地理新編』について

『万国地理』は上下二巻から成り、1902年に上海商務印書館から出版され、同年に第二版が刊行された。1906年の春ごろに出版された『商務印書館出版教科書目』には以下のように書かれている。

万国地理新編 高等小学堂用

懷寧陳乾生編輯。全球総論、アジア洲、ヨーロッパ洲、アフリカ洲、オーストラリア洲、アメリカ洲の六編に分かれている。疆域、気候、政教、風俗、民情、物産について明晰に記載されており、文章の筋道が立っており、雅文で飾られており、簡明で理解し易い。用いられた地名は全て旧称のままで、最近の譯本の新奇奇怪な弊害が全くなく、小学教授にとって最も相応しいものである。<sup>21)</sup>

ここから分かるように、この本は小学教育の教材となることを意図して販売されたのであり、第二版が刊行された事実から考えて、ある程度の評価と歓迎を受けたのであろう。

紹介されているこの六編の内、ヨーロッパ洲までが上巻、アフリカ洲以降は下巻に収められている。次節以降で述べるとおり、陳独秀はその後もなくアジアとヨーロッパを主に論じるようになり、アフリカ洲やオーストラリア洲などを眼中に入れることは少なくなったため、本稿において下巻について論及しないことによる支障は大きくない。

次に、この教科書の著者について考察したい。陳独秀は安徽省懷寧県出身であるが、「独秀」という名前は1914年に『甲寅雑誌』の中で初めて使われて以降、主に『新青年』を通して広まった名前であり、『万国地理』出版当時はまだ「独秀」と名乗っていなかった。第一版と第二版の本文の最初の一行目に「皖懷陳乾生重輔氏編輯」と書かれているが、「乾生」というのは彼の官名で、任建樹氏によると1897年冬に執筆した『揚子江形勢論略』での署名から使われたようである<sup>22)</sup>。また1897年の同書には、字として「衆甫」が用いられているが、当時彼の友人らは「仲輔」や「重甫」、「仲甫」とよく間違っていて書いており、発音やアクセントにおいて「重輔」は

21) 周振鶴(編)『晚清營業書目』(上海書店出版社、2005年4月)p.229。本文の「全球総論」は「全地総論」の間違いであるが、原文通りに引用して訳した。また本稿では特に記載がない限り、訳文は全て著者の手による。以下原文：

「万国地理新編 高等小学堂用

怀宁陈乾生编辑。凡分六编，首全球总论，次亚洲，次欧洲，次非洲，次澳洲，次美洲。凡疆域、气候、政教、风俗、民情、物产，记载明晰，纲举目张，文词雅饰，浅显易解。选用地名皆沿旧称，绝无近日译本新奇怪之弊，以供小学教授最为合宜。」。

22) 任(2012) p.8-9。



それらと同じであることから、この字は彼の字を指すパターンのひとつであると考えてよいであろう。なお、最終的に陳独秀は「独秀」に次ぐ頻度で「仲甫」を号として用いるようになった。

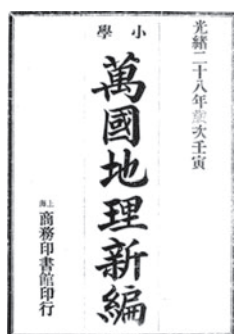


図1



図2

※「光緒二十八年」の右側に見える「一九〇二年」は書き込みである。

本教科書が商務印書館から出版されたことはすでに述べたが、当社にとってこの教科書はどのような位置付けだったのだろうか。

アヘン戦争から北京条約までの20年間で、宣教師が設立した学堂は約50カ所にのぼり、約1000人の学生がそこで学んでいたといわれる<sup>23)</sup>。1860年代になると李鴻章（1823-1901）などの洋務派によって、京師同文館や福州船政学堂をはじめとするヨーロッパ語を習得した人材や機械・兵器を扱う専門技術者を育成する機関が作られていくが、1892年においてカトリック系の学堂の数だけを見ても、中国人が建てた学堂の16倍もあったことから<sup>24)</sup>、新式教育のほとんどはヨーロッパ人によって担われていたことが分かる。またキリスト教系の学堂は必ずしも中国における教育の普及を第一目的としていたわけではなく、依然として科挙試験が正統な立身出世のコースだったこともあり、官僚候補生たる学生らの新学に対する関心は低く、新式教育を受けた学生も、必ずしも体系的に西学を学んだわけではなかった<sup>25)</sup>。

辛丑条約ののち、清朝は1902年によく『欽定京師学堂章程』を發布して新学制をしいた。しかし社会から新式教育の必要性が強く求められていたにもかかわらず、この章程においても種々の制限が加えられ、新学制に対応する教科書の準備や必要な教育経費の確保もされなかった<sup>26)</sup>。このように日本に倣った改革が叫ばれ、新学制も發布された状況においてすら、清朝は新

23) 顧長声『伝教士と近代中国』（上海人民出版社、1981年4月）p.226参照。

24) 桑兵『晚清学堂学生與社会変遷』（稻禾出版社、1991年11月）p.36参照。

25) 桑（1991）p.46-50参照。

26) 楊楊『商務印書館：民間出版業の興衰』（上海世紀出版集团、上海教育出版社、2000年11月）p.44参照。

式教育を重視・推進することがなかった。そのため代わりに民間が社会の需要に応え、教育分野で主導的な役割を果たすことになった。その担い手になった会社のひとつが商務印書館であった。

1897年に商業関係のものを主に扱う小さな印刷所として始まった商務印書館は、開業2年目に印刷会社から出版社へ転身する。その最初の出版物は『華英初階』、『華英進階』という2つの英語の教科書であった<sup>27)</sup>。その後、1903年に日本の金港堂と合併し、1904年からは小学堂用の教科書を出版するようになった。清政府が1906年に初めて行った初等小学教科書審査の暫定リストによれば、リストアップされた全教科書の約52%が商務印書館出版のものであり<sup>28)</sup>、こうして商務印書館は、小学用教科書市場の最大手にまで発展した。この発展を支えたのは、南洋公学訳書院院長だった張元済（1867-1959）であった。南洋公学でも新式教育のための教科書作りがなされており、そのノウハウを買われて1902年に張元済は商務印書館に入社した。1903年からは編訳所所長となり、ちょうど上海に移住してきた日本の元高等師範学校教授で元教科書検定審査官であった長尾雨山（1864-1942）などを招聘して、小学用の教科書編集を本格的に始めた。陳独秀は1902年3月上旬に中国に戻り<sup>29)</sup>、同年に『万国地理』を出版したのであるが、このような前後の出来事から考えれば、商務印書館はまだ小学用の教科書の編集・出版を本格的に始めてはいなかったとはいえ、陳独秀のこの教科書は新式教育用の教材販売の先駆けであったと見做すことが出来る。第二版が印刷・出版されたのも、テキストを必要としていたキリスト教系や中国人による学堂が多数存在した上海の地で、彼の本が時代のニーズに応えるものだったからであろう。

地理書という観点から見ても、1902年は重要な年である。1901年まで地理書は年数冊しか出版されていなかったが、1902年には合計25冊、1903年には合計34冊と地理書出版ブームが起こり、1905年に「留学生取締規定」を起因とする一斉帰国のため、一時的にその出版数は一桁まで減るが、1907年まで出版数は毎年二桁を切ることはなかった<sup>30)</sup>。陳独秀の地理教科書はその地理書出版ブームの先陣でもあった。

最後に本の形態をみてみたい。日本は明治の始めごろから文明開化の象徴として、洋装本がまず法律書や官庁出版物に用いられ、1887（明治20）年代前後になると、1877（明治10）年代までは和装本で販売されていたような書籍類も洋装本に切り替わった<sup>31)</sup>。一方中国では、明代のマテオ・リッチ（Matteo Ricci, 1552-1610）以来、中国人の風俗習慣となるべく衝突を避ける

27) 樽本照雄『初期商務印書館研究』増補版（清末小説研究会、2004年5月）p.28-29参照。

28) 李澤彰「三十五年来中国之出版業」張静廬（編注）『中国現代出版史料丁編』下（中華書局、1959年）p.384-385。

29) 唐、林（1988）p.20参照。

30) 鄒振環『晚清西方地理学在中国』（上海古籍出版社、2000年4月）p.417-419参照。

31) 木戸雄一「明治期「ボール表紙本」の誕生」国文学研究資料館（編）『明治の出版文化』（臨川書店、2002年3月）参照。



伝統があったため、長らく伝統的な袋綴じ本が教会関連施設などでも出版されていた<sup>32)</sup>。そのため中国のジャーナリズムの始祖といわれる梁啓超ですら、1898年に横浜で出版した『清議報』は、日本で既に洋装本が一般的であったにもかかわらず袋綴じの形態であった<sup>33)</sup>。しかし訳書彙編社が1900年から発行した『譯書彙編』以来、日本で出版された留学生の雑誌は全て洋装本になり、梁啓超も1902年の『新民叢報』から洋装本に切り替えた<sup>34)</sup>。

商務印書館について言えば、1904年にその後中国近現代史上最大規模の雑誌となる『東方雜誌』を洋装本で出版し、それが他社にも大きな影響を与えることになった。『万国地理』は1902年に出版されたため、当然袋綴じ本である<sup>35)</sup>。この点から陳独秀は同書の完成品を日本から持ち帰って出版だけを商務印書館に委託したのではなく、入稿、印刷、出版などの製本・販売行程をすべて中国で行ったと考えられる。

### 三、『小学万国地理新編』における世界描写

では次に『万国地理』の内容に立ち入り、青年期の陳独秀がどのように世界を描写・紹介していたかを見てみたい。

本書は全地総論、アジア各国、ヨーロッパ各国、アフリカ各国、オーストラリア各国、アメリカ各国の全六編からなる。「全地総論」は、象数地理、形質地理、政事地理の三章に分かれ、その他は全て第一章が「総論」、以下各国の紹介という構成になっている。

第一編の「全地総論」の第一章「象数地理」は太陽系や地球の自転・公転、緯度・経度など、第二章「形質地理」は陸地や海洋の地域分類、地質、地形などについて書かれており、両方とも自然地理学的内容である。一方、第三章「政事地理」は人間社会について、例えば人種や社会の発展度、宗教、政体、住民の気質など、著者の主観的な要素が含まれ易い内容が書かれている。そのためこの部分に陳独秀が当時イメージしていた世界像を読み取ることができる。以下、この第三章を中心に見ていきたい。

第三章「政事地理」は、まず地上に生息する動植物について述べ、次いで動物のひとつである人類は才力によって自然を開拓し、文明を発達させてきたと以下のように記す。

変遷すること既に久しく、日増しに興隆し、文字を創り、道理を考究し、都市を建て、政治を設けた。人類文明は日々万物の上をいくのである。<sup>36)</sup>

32) さねとう (1981) p.298-299参照。

33) 中華書局が1991年9月に出版した影印版の『清議報』から確認できる。

34) さねとう (1981) p.323。

35) 筆者が所持する同書の影印版からもそれは確認できる。

36) 皖懷陳乾生重輔氏編輯『小学万国地理新編』巻上（商務印書館、1902年）p.3。以下脚注でも『万国地理』と表記する。以下原文：

続いて、内容は人類に関する記述になる。彼は人類について以下のように紹介・説明する。

人類は場所、言語、風俗が異なるために、多くの種類に分けられる。〔……〕種の大略は五つに分けられ、ひとつは黄種人、またの名をモンゴル種、ひとつは白種人、またの名をコーカソイド種、ひとつは棕色人、またの名をマレー種、ひとつは黒種人、またの名をニグロ種、ひとつは紅種人、またの名をインド種〔インディアン種：筆者注〕である。

〔中略〕

人種の高低は三等に分けられる。第一は文明で、徳、慧、術、智は日々発達して進歩しているものである。第二は半文明で、文字や義理〔学問や普遍的な道理の意：筆者注〕は多少野人と異なるが、物理に明るくなく、鬼神に惑わされ、古いものを守ることに篤く、変法して新しいものを求めることを知らない。第三は野蛮で、人の心はそれぞれで、公や集まることもなく、漁や狩をして生き、畑を耕すことを知らず、文字や義理を聞いたことがない。

白種人は日々文明に近づき、黄種人はなお半文明で、黒色、棕色、紅色の三種人は皆未開化の野蛮である。<sup>37)</sup>

ここで彼は人類を皮膚の色と人種によって五つに分類し、それぞれを三つの等級に分け、その関係について、白人は文明、黄色人は半文明、その他は野蛮としている。

皮膚の色や人種に基づいて人類を分ける方法は、18世紀後半のブルーメンバッハ（Johann Friedrich Blumenbach, 1752-1840）の五分類説以来、ヨーロッパでよく使われた。1892年にはイギリス人宣教師フライヤー（John Fryer, 1839-1928）が、上海で出版していた科学雑誌『格致彙編』に五分類説をイラスト入りで紹介・説明した<sup>38)</sup>。その中では、モンゴル人（黄人）に関して、「才智は靈敏、古遠に教化され、風習は文明的、既成の規則を守ることを喜び、古い見方に拘泥し、甚だ刷新せず〔……〕」と、コーカソイド人（白人）は、「才能はすでに高く、敏慧は群を超え、文学・政治・物理は盛んで心を尽くし、格致を講習して技芸は代々進んで益して

---

「變遷既久。日益興盛。創文字。攷事理。建城邑。設政治。人類文明。日高出於萬物矣。」。

37) 『万国地理』p.3-4。以下原文：

「人類之中。又因方言言語風俗不同。分為多種。（中略）種之大概。分為五。一曰黃種人。又名蒙古種。一曰白種人。又名高加索種。一曰棕色人。又名馬來種。一曰黒種人。又名尼格羅種。一曰紅種人。又名印度種。

（中略）

人種高下。分為三等。第一曰文明。徳慧術智。日發達而有進歩者。第二曰半文明。文字義理。稍別于野人。然物理不明。惑于鬼神。篤于守舊。不知變法求新焉。第三曰野蠻。人各一心。不公不群。漁獵為生。罔知耕種。文字義理。無聞焉。

白種人日近文明。黄種人猶半文明。若黒色、棕色、紅色、三種人。則皆未開化之野蠻也。」。

38) 「人分五類説」『格致彙編』第7年、1892年秋季参照。

いる」と、アフリカ人（黒人）は、「性情は蠢昧、識見は浅く狭い」と、アメリカ土人（紅人）は、「最も文教し難く、狩をして生で食することを喜び、定まった処に居しない。この類の古人についての概略はなお未知である」と、マレー人（櫻色人）は、「善惡に明るくなく、好惡に偏執する〔……〕文や学は多くなく、才幹は十分にあるが、變動して常が無く、新しいものを好んで興味を持つが突き詰めて考えない」と述べた<sup>39)</sup>。陳独秀の文章と比較すれば、用語や表現の上で多少の差があるとはいえ、白人を美辞麗句で形容し、黄色人を評価しながらも、同時に問題点を指摘し、その他の人種を酷評する、という大方の表現方法は同じである。

また人間社会を等級に分けることに関して、駐英・駐仏公使に任じられた郭嵩燾（1818-1891）は、「蓋し西洋では政教修明の国を、色維來意斯得〔civilized、文明的〕と言い、歐洲諸国は皆こう呼ばれる。われわれ中国、及びトルコ、及びベルシャは哈甫色維來意斯得と言う。哈甫とは、訳言すれば半分で、意味は半分教化され、半分教化されていないことを言う。阿非利加の諸回國を名付けて巴爾比里安〔barbarian、野蛮的〕と言い、中国が夷狄と呼ぶものと同じで、西洋では無教化と言う」<sup>40)</sup>と記しており、中華思想をベースとしながら文明、半開化、野蛮を規定し、どの国がどれに属するのかを示した。

しかし人種や社会の等級による人間の分類に関して、1900年前後の進歩的知識人に最も影響を与えたのはやはり梁啓超であった。彼は日本亡命以前に、「ヨーロッパ人は列国の教を論じるとき、三等に分ける。一は有教、二は無教、三は半教であり、中国は半教の国を為す。蓋し中国の威勢、文物、法令、制度は先人が残したもので、代々益を増してきており、実に繁榮し、かつ備わっていることは、固より非洲の黒人や墨洲の紅蕃などと同類ではない。しかし風俗の腐敗、読書人の見識の狭さ、民衆の愚かさ、産業の不興、智学の不開〔……が原因で、中国は：筆者注〕無教と呼ばれるのである」<sup>41)</sup>と述べ、社会の等級を三つに分け、各国をそれぞれに振り

39) 同上書、p.9-10。以下原文：

「才智靈敏。教化古遠。習尚文明。喜守成規。拘泥舊見。不甚翻新。」

「才能既高。敏慧超群。文學政治物理。靡弗盡心。講習格致。技藝代有進益。」

「性情蠢昧。識見淺隘。」

「文教最難化之。喜遊獵生食。居無定處。此類古人。尚未知之略。」

「善惡不明。好惡偏執。（中略）文學不多。才幹頗有。變動無常。喜新好奇。」

40) 郭嵩燾「光緒四年（1878年）二月初二日」『郭嵩燾日記』3（湖南人民出版社、1982年10月）p.439。以下原文：

「蓋西洋言政教修明之國曰色維來意斯得（civilized、文明的），歐洲諸國皆名之。其餘中國及土耳其波斯曰哈甫色維來意斯得。哈甫者，譯言得半也，意謂一半有教化，一半无之。其名阿非利加諸回國曰巴爾比里安（barbarian、野蛮的），猶中國夷狄之稱也，西洋謂之无教化。」

41) 梁啓超「復友人論保教書」（1897年）、『飲冰室合集』文集之三（上海中華書局、1941年）p.10。以下原文：

「西人論列國教。分為三等。一有教。二無教。三半教。中國為半教之國焉。蓋其聲明文物。典章制度。先聖所留貽。歷代所增益。實繁且備。若儕之於非洲之黑人。墨洲之紅蕃。固有不類。然其風俗之敗壞。士夫之隘陋。小民之蠢愚。物產不興。智學不開。（耳目充閉。若坐智井。恥尚失所。若病中風。）則直謂之無教可

分けた。

また1902年に、西洋では人種を黄色種、白色種、棕色種、黒色種、紅色種の五つに分類されていることを紹介しているが<sup>42)</sup>、それ以前から「現在地球には、棕・黒・紅の三つの蠻種の他は、概ねみな開化の民である」<sup>43)</sup>、「彼の三種は論じるに足りない。これより百年は、実に黄種と白種人の血戦の時代となる」<sup>44)</sup>とも述べていた。同時に、中国史に関係の深い黄色人を紹介し、苗族について「猶、今日のアメリカの紅人やオーストラリアの黒人である」と、漢種について「いわゆる文明の胄、皇帝の子孫これなり〔……〕いわゆるアジアの文明者である」と述べたように、黄色人種や中国内部の民族の間にも優劣の差をつけ、劣種とされた人々を黒種人・紅種人と同等であるとまで見做した<sup>45)</sup>。

陳独秀の地理教科書と同じ1902年に日本の丸善から出版された『世界地理学』（矢津昌永著、呉啓孫訳）においても、人種を五つに分け、人間社会を未開、半開、開明の三つの等級に分ける紹介をしていた。著者の矢津昌永（1863-1922）は日本の高等師範学校で教えた地理学者であり、清国人留学生教育にも関わったことのある人物であった。

呉啓孫の訳書では、「嗚呼、文明が開き、新学が日々興する中で、士がこの世に生まれながら宇内の形勢を知らなくて、他に何を知る必要が有るのか」<sup>46)</sup>と書かれ、世界地理に関する知識の普及を目指していたが、同時に人種の強弱、国家社会の盛衰、文明の度合いによるランク付けなどがなされていた。以上の点から、これらの情報や知識は梁啓超の著作からだけでなく、日本の地理学関係の書物を手にする機会があれば、容易に獲得できるものでもあった。陳独秀も地理教科書を著すに当たり、世界の大概を知る基本的な情報としてこれらを盛り込んでいたのである。

しかし付け加える必要があるのは、確かに『世界地理学』においてもヨーロッパを進んだものの、アジアを遅れたもの、と見做していたが、陳独秀のように黄色人は半文明とはっきり記述することはなく、榮えているかどうか、国は強いかなどが内容のベースであった。つまり陳独秀は中国や日本以外のアジアが半文明であることを、少なくとも『世界地理学』よりも

耳。』。

42) 中国之新民「歴史與人種之關係」『新民叢報』14、1902年7月15日参照。

43) 中国之新民「論政府與人民之權限」『新民叢報』3、1902年2月1日。以下原文：

「今地球中、除棕、黒、紅三蠻種外、大率皆開化之民矣」。

44) 任公「論變法必平滿漢之界始」『清議報』2、1898年11月21日。以下原文：

「彼三種者不足論矣。自此以往、百年之中、實黃種與白種人玄黃血戰之時也」。

45) 任公「中国史叙論」『清議報』90、1901年7月21日。以下原文：

「猶今日阿美利加之紅人澳大力亞之黒人也」

「所謂文明之胄、皇帝之子孫是也。（中略）所謂亞細亞之文明者」。

46) 矢津昌永（著）、呉啓孫（訳）『世界地理学』（丸善株式会社、1902年10月）p.25（国立国会図書館 近代デジタルライブラリーより <http://kindai.ndl.go.jp/>）。以下原文：

「嗚呼、文明大啟、新學日興、士生斯世、宇内形勢之不知、則他於何有。」。

意識していたことが読み取れる。

その後、『万国地理』は以下のように続く。

人情や風俗は、場所によって異なる、山に居する人は頑固であり質素であり、労に耐えられるが、開化し難い。平原の人は、天機活潑で、進取することを好む。川沿いや海沿いの人は、敏捷で狡猾機敏、物事に通じ、開化し易い。

熱帯の人は、炎天下で蒸し暑く、軟弱な者が多く、しかも動植物は繁殖し、衣食を求め易い。故に懶惰に慣れていると言われ、日に日に痴愚になっている。温帯の人は、寒暖がちょうどよく、気質がよく、文明に進み易い。寒帯の気候は極めて寒く、動植物は極めて少なく、衣食が豊かではないため、知恵が発達し難い。<sup>47)</sup>

ここでは文明社会の発達と自然環境の影響について述べられているが、これにも類似した内容が梁啓超の文章に見られ、灼熱の地や極寒の地に暮らす人間は、自然環境の影響を受けて他のことに手が回らなくなるため、温帯に住む人だけが文明の国民になりえたと述べたり<sup>48)</sup>、高原、平原、海や川と人間の生業の関係を論じたりした<sup>49)</sup>。

このように自然環境や地理環境が、人間の気質、性格、生業、文明度などを確定させる重要な要因となるものと考えられていた。

以上が第一編の中で、特に陳独秀の世界理解がよく表れている部分である。第二編以降、彼はアジアやヨーロッパなどの地域を項目ごとに分類し、その地域に属する国をそれぞれ紹介している。この紹介と「政事地理」に関係する部分で、その全てにおいて彼が非常に重視しているポイントに政体（統治形態）が挙げられる。

第一編においても各国の政体は紹介されていた。

世界各国の政体は三種類に分けられる。一つ目は君主専制政体である。一国の政治は国の君主の専擅であり、人民は参与できない。二つ目は君主立憲政体である。議政院が憲法を定め、君も民も一緒にそれを守る。およそ国の政治は人民すべてが参与できる。三つ目は民主共和政体である。一国の政治は、全て人民によって取り仕切られ、君位は民衆の公選

47) 『万国地理』p.4。以下原文：

「人情風俗。因地而異。山居之人。強樸耐勞。難於開化。平原之人。天機活潑。樂於進取。沿江沿海之人。敏捷狡慧。識見明通。易於開化。」

「熱帯之人。太陽炎蒸。身多軟弱。且動植蕃衍。衣食易求。故咸習為懶惰。日益癡愚。温帯之人。寒熱適宜。性情通達。易進文明。寒帯氣候極冷。動植稀疏。衣食不豐。故智慧難以發達。」

48) 中国之新民「地理與文明之關係」『新民叢報』1、1902年1月1日参照。

49) 任公「中国史叙論」『清議報』90、1901年7月21日参照。



により、数年に一回交代する。<sup>50)</sup>

では具体的にある国を紹介するとき、どのようにこの三種類の政体分類が用いられているのであろうか。いくつかの国を選んで引用する。

中華帝国：

古から政体は全て専制であり、政治は大小関係なく、朝廷の命令に従う。人民は参与できず、生かすも殺すも、与えるも奪うも、全て君主一人の専有である。

日本帝国：

政体は古くは封建制で、君位は一姓が継ぎ、君主が政権を総攬していたが、今の天皇の明治は即位以来、外患を恐れ、発憤して強化を図り、下詔して議院を開き、民に参政を許した。それゆえ国は強くなり、アジア最初の立憲政体が生まれ、日本から君民共主の国政が始まった。

高麗王国：

政体は君主専制であり、大臣もまた権限を独占し、人民は〔政治に：筆者注〕参与できない。以前は中国に属し、今では独立自主の国になるも、法制はなお多く中国に倣っている。官吏の多くは人民を虐待し、人民は萎縮して、官吏に対抗して民権の自由を主張しながらない。ゆえに国力は日々衰弱している。

インド：

各処に酋長がおり、専制政体のままである。名分をもって妄りに自尊しているが、その実はみな英国人のために奔走して供するだけである。

フランス民主国：

政体は民主立憲であり、政府は貴族と衆民の両院からなる。古くは君権が最も重んじられたが、ルイ王朝の革命以来、ヨーロッパで民権が最も盛んな国に変わった。

---

50) 『万国地理』p.4。以下原文：

「全地各國政體。分為三種。一曰君主專制政體。一國之政。由國君專擅。人民不得參與。二曰君主立憲政體。議政院立定憲法。君民共守。凡國之政。人民皆得參與。三曰民主共和政體。一國之政。均由人民主持。君位由眾民公選。數年一易。」

イギリス王国：

政体の名目は君主立憲であるが、実際は民主共和である。国の大権は全て衆民議院が掌り、君主と貴族はみな実権がない。

ドイツ帝国：

政体は君主立憲であり、大小二十六国が連邦となって一国をなしている。プロイセンが各部の長であり、その国王がドイツ皇帝である。〔……〕議会は上下両院に分かれており、上院は連邦政府に振り分けられて各連邦の代表をなし、下院は民衆の投票によって決められる。

ロシア帝国：

政体は君主専制で、議会議院を立てず、君主の独攬政権である。〔……〕各大臣が会議し、全て平民を抑圧する政策を執り行う。国には尼西利党〔ツァーリズム・農奴制の打倒を目指したグループ（ナロードニキ）の過激派が立ち上げた「人民の意志」の事か：筆者注〕の人が政府に反抗している。民の中で朝政に不満がある者は多くこれに従う。前皇帝のアレクサンドルは、十年前にこの党によって殺されている。近ごろ再び騒擾が尋常ではなく、大小学校の師弟で、この党に従わない者はおらず、ロシアの君臣はまもなく終わる形勢である。

トルコ帝国：

政体は君主専制であり、万政独裁である。国事は全てイスラム教の經典コーランに基づく。イスラム教を国教と定め、教徒の権力は極めて大きく、政事・教育全てに干渉する。ヨーロッパの文学技芸を修める者少なく、故に民智は日に日に愚昧になり、国勢も日々衰頹している。<sup>51)</sup>

---

51) 『万国地理』。以下原文：

「中華帝國：

自古政體。皆主專制。政無大小。聽命於朝。人民不能參預。生殺與奪。皆君一人專之。」(p.7)。

「日本帝國：

政體古係封建。君位一姓相承。君主總攬政權。今皇明治。即位以來。忧心外患。發憤圖強。詔開議院。許民參政。國由以強。亞洲創行立憲政體。君民共主國政者。自日本始矣。」(p.9)。

「高麗王國：

政體。君主專制。大臣亦攬權。惟人民不能參預。前屬中國。今為獨立自主之邦。而法制猶多倣中國。官吏多虐待人民。而人民委弱。無敢主張民權自由。與之相抗。故國力日益衰弱焉。」(p.9)。

「印度：

各處酋長。尚擅專制政體。妄以名分自尊。實皆供英人奔走耳。」(p.15)。

「法蘭西民主國：

そして彼はアジア各国をまとめてこのように述べる。

アジア州内は昔から人口が繁殖し、開化が最も早く、全世界の人間はここから広がった。世界の義理工技はすべて中国からインドに伝わり、インドからペルシャやエジプトに伝わり、〔……〕ヨーロッパ各国に伝わった。中国には孔子、インドには釈迦がおり、みな世界の大偉人である。

〔中略〕

君を尊び、神を敬い、男を重んじ、女を軽んじ、後退して前進せず、人の後ろに甘んじ、新しいものを厭い、古いものを喜び、己を尊び、人を卑するのは、全アジア州人共通の習俗である。全アジア州の生業は、概ね農牧を重んじて工商が盛んではなく、原材料を産出する。精巧な物の製造は、皆欧米からの輸入に仰ぐ。日本だけが最近ヨーロッパの方法に習い、工芸を重視して、製造の業を興し、富強の効果が著しい。<sup>52)</sup>

一方、ヨーロッパ各国に関しては、

---

政體為民主立憲。政府即貴族眾民兩院。古時君權最重。自路易王朝革命以來。變為歐洲民權最盛之國矣。」(p.21)。

「英吉利王國：

政體名雖君主立憲。實係民主共和。國之大權。悉為眾民議院所執。君主及貴族。均無實權。」(p.22)。

「德意志帝國：

政體係君主立憲。由大小二十六邦。聯為一國。普魯士為各部之長。其國王即德意志皇帝。(中略)議會分上下兩院。上院由聯邦政府分舉。為各邦之代表。下院由眾民投票公舉。」(p.23)。

「俄羅斯帝國：

政體係君主專制。不立議會院。君主獨攬政體。(中略)各大臣。亦得會議。咸執壓制平民之政策。國中有尼西利黨人。反抗政府。民之不平朝政者多附之。前皇亞□山大。即于十年前被該黨所刺。近復擾動異常。凡大小學校之師徒。無有不附該黨者。俄之君臣。有岌岌不可終日之勢焉。」(p.30-31)。

「土耳其帝國：

政體係君主專制。萬政獨裁。國事悉據回教經典可蘭。(中略)宗教定回教為國教。教徒權力極大。政事教育。胥干涉焉。歐洲文學技藝。習者寥寥。故民智日以愚昧。而國勢日以衰頹矣。」(p.32)。

ロシア帝国の部分について、1902年当時のロシア皇帝はニコライ2世であるが、実際に暗殺されたのはその二代前の皇帝であるアレクサンドル2世であり、それは1881年の出来事であった。よって陳独秀は1891年前後の書物を参考に、この部分を記述したことが分かる。

52)『万国地理』p.5。以下原文：

「洲内、自古戸口繁殖。開化最早。全地人口。由此播遷。世界義理工技。由中國傳於印度。由印度傳於波斯、埃及。(中略)傳於歐美各國。中國有孔子。印度有釋迦牟尼。皆世界之大偉人也。

(中略)

尊君敬神。重男輕女。退索不前。甘居人後。壓新喜故。尊己卑人。為全洲人之通俗。全洲生業。概重農牧。工商不盛。產出生料。製成精巧之物。皆仰輸於歐美。惟日本近效西法。崇尚工藝。製造之業興。富強之效著焉。」。

〔西洋人が：筆者注〕至った場所の土人は、往々にして滅してしまった。それは西洋人の才学技芸が他民族より高いからである。〔……〕人民は聡明で手が器用で、働く者は競い合っている。〔……〕ヨーロッパ州は土地が狭いが民は強く、十数国ある中で、みなが独立自主をなし、他者に属するものはない。ただ大小が違うだけである。<sup>53)</sup>

と述べている。彼は日本を例外として、専制をアジアの特徴のひとつに数えた。また政体の違い以外にも、君主や神を敬い、伝統に固執して変わろうとせず、ただ生活必需品を生産するだけで満足する向上心の欠如をアジアの風格とした。アジアを文化としてはヨーロッパよりも早く開化したとしつつも、明治維新後の日本が民衆に参政を許した点やフランス革命後のフランスで民権が盛んになった点などの政治的变化を評価し、専制が君主立憲制や民主共和制に変わったヨーロッパと日本、そして昔と変わらない日本以外のアジア、という二つのコントラストを描き出した。先の文明・半文明・野蛮の特徴を紹介した部分と照らし合わせれば、彼は君主立憲制や民主共和制に変わった注53のようなヨーロッパを文明と捉え、専制のままである注52のようなアジアを半文明とイメージしていたことが読み取れる。

彼はヨーロッパを民主共和か君主立憲の国としていたが、ロシアとトルコの二国だけは専制の国としていた。トルコについて、ヨーロッパにいる黄色人とはトルコ人のことであると例外的に紹介しており、白人の国であるロシアについても、半文明的で無変化だと彼が見做したアジアと同じ専制国に分類した。とはいえ、自由を求めるための反政府運動が行われている事を紹介することで、アジアとは異なっていることを暗に伝えた。この点は高麗王国についての記述と比較すれば、違いは一目瞭然である。

「明治の三書」のひとつである内田正雄（1839-1876）の『輿地誌略』<sup>54)</sup>では世界の政体を五つに分け、「君主擅制ハ夷狄ノ風習ニシテ其残忍ナルヲ厭フ可ク 君主専治、貴顕専治ハ開化の進マザル国ニ行ハレ強メテ黔首ヲ愚ニシ政府私ヲ行フニ便ナリ 君民共治ト共和政治ハ共ニ文明ノ国ニ行ハレ開化ノ域ニ進歩スルハ此二政体ニ超ルモノ無シ」<sup>55)</sup>と述べ、続けて西洋諸国は全て君民共治、アメリカは共和政治と規定した。

さらに別の箇所では、人類の歴史を「世界開化ノ歴史」と名付け、野蛮から開化へ、開化から「更ニ高等ナル文明開化ノ域」へと進歩してきたと論じ、「半開ノ民」は未開の民より遙かに高等の域に達しているが、彼らに「固有ナル習俗ハ皆古ヲ貴ビ今ヲ卑ミ更ニ開化ニ進歩スルヲ

53) 『万国地理』p.20。以下原文：

（西方人）「足跡所至。土人往往滅焉。因其才學技藝。實高出於他族也。（中略）人民聰巧。百工競起。（中略）全洲地小而民強。為國十餘。皆獨立自主。無有屬於人者。惟大小不一。」

54) 1870～1875年にかけては自筆であるが、1876年に未完成のまま内田は死去したため、1877年に西村茂樹が続きを刊行した。

55) 内田正雄『官版 輿地誌略 亜細亞洲 一』（1870年）p.104。（関西大学図書館増田渉文庫所蔵）。引用文の漢字は常用漢字に改めた。以下同じ。

希ハズ必ス其自国ヲ以テ第一トシ〔……〕貴族ハ平民を蔑視シ男ハ女ヲ卑ミ〔……〕物理ヲ講究セズ虚誕ニ惑溺シ〔……〕虚飾ヲ貴ビ〔……〕古来伝受ノ儀式体裁ノ外切実ナルヲ知ラズ」<sup>56)</sup>とする。一方ヨーロッパ史を説明する部分では、信仰の自由や宗教権威の衰退、学問や技術、知識の発達、そしてそれらが重ね合わさった結果、「人情政体復タ此ニ一変シテ終ニ君民権を分ケ国ハ憲法ヲ確定シ民ハ不覇自由ヲ得ルニ至」<sup>57)</sup>る一大変革が起こったと述べた。

本書は1872年の学制が発布されて以降、上等小学の地理教科書として用いられ、また1874年ごろ東京師範学校の第三級の教科書としても使われた<sup>58)</sup>。このように明治初期の日本の地理書において、すでに政体（民衆の政治への参与度）や社会運動の有無などを、その国の住民の文化度や文明度を推量する物差しとする議論が行われ、初等教育に従事する教師を育成する学校のテキストの中でも取り上げられていたのである。

梁啓超にも同じような記述が見られる。彼は「文野三界之別」の中で、進化論に基づいて世界を蛮野、半開、文明の順番で進展していくとし、「常に天災を畏れ、天幸を願い、座して偶然の禍福を待つ〔……〕このような者を蛮野の人という〔中略〕なぞらえ似せることの細かさは巧みといえども、創造する能力は乏しく、古いものを修することを知り、古いものを改めることを知らない。人の交際に規則があるといえども、その規則というのは全て習慣からなっている。このような者を半開の人という。〔中略〕自治の能力が身についており、他人の恩恵を仰がない。〔……〕前進して後退せず、上昇して下降せず、学問は虚談を重視せずに創造を重視する〔……〕このような者を文明の人という」<sup>59)</sup>と述べ、古いものを守ろうとする半開人と、前進・上昇しようとする文明人という違いを説明していた。

また彼はヨーロッパと中国の旧思想とヨーロッパの新思想とを比較し、ヨーロッパも中国も、君主や宗教権威の力が強く、人々は政治参与できないなどの点で旧思想は類似していたが、ヨーロッパの新思想は人民が国家の主体であり、この点が旧思想と絶対的に異なると述べた<sup>60)</sup>。そして政体が専制であることにに関して、それこそが各国の歴代君主の統治が転覆された遠因・近因であり、ロシアを除いて、イギリス、ドイツ、日本などの君主は同じ過ちを犯さないようにしており、専制政体のままではこの世界で生きていけない、とまで論じた<sup>61)</sup>。

56) 同上書、p.89-90。

57) 同上書、p.121-122。

58) 中島満洲夫「内田正雄著『輿地誌略』の研究」『地理』第十三卷第十一号（古今書院、1968年11月）p.29 参照。

59) 任公「文野三界之別」『清議報』27、1899年6月11日。以下原文：

「常畏天災、冀天幸、坐待偶然之禍福（中略）如是者、謂之蠻野之人。（中略）摸擬之細工雖巧、而創造之能力甚乏、知修舊而不知改舊；交際雖有規則、而其所謂規則者、皆由習慣而成。如是者、謂之半開之人。（中略）能自治其身、而不仰仗他人之恩威（中略）有進而無退、有昇而無降學問之道、不尚虛談、而以創辟新法為尚（中略）如是者、謂文明之人」。

60) 中国之新民「国家思想變遷異同論」『新民叢報』10、1902年5月15日参照。

61) 中国之新民「論專制政体有百害於君主而無一利」『新民叢報』21、1902年11月1日参照。



これまで特に政体に着目しながら、彼が『万国地理』において世界をどのように描写してきたかについて述べてきた。彼は世界を野蛮から文明に進化するという社会進化論に基づき、政体もそれに応じて専制から共和制、もしくは立憲君主制へ変化すると見做した。また過去におけるアジアの国々の先進性を認めながらも、君主や宗教への盲従、尊卑という価値観、伝統を守って革新しようとしなない心理態度などの「半開」的要素が、アジアの進歩・発展を阻害しているとも考えていた。その一方、ヨーロッパは前進や発展、創造などの革新的志向によって権威の力が弱まり、人々は政治参加の自由を獲得するほど文明的になったと説かれた。

梁啓超や内田正雄は、このような世界モデルを提示することによって、中国や日本がヨーロッパより遅れていることを説明し、そしてより進んでいる相手に追いつき、対抗するためには、政体の変更や近代国家に必要な「新民」の育成などを含めた国内の改革を実行し、ヨーロッパを進化させたさまざまな要素を取り入れていく重要性を主張した。陳独秀も『万国地理』において政体の違いを各国の項目の中に盛り込み、中国にも蔓延するアジア全体の習俗を改め、国を強化するためには政体をも改める必要がある、と結論付けるような世界描写をしたのである。

## おわりに

本稿は陳独秀の救国意識の来源である世界認識がどのように形成されたのかについて知るひとつの手がかりとして、1902年に出版された『小学万国地理新編』の中で、青年期の陳独秀がどのように世界を描写したかを見た。その方法として、この地理教科書の上巻の第一編の「政事地理」と、第二編以降で関連する叙述を集成し、初来日したところの陳独秀が世界についてどのような知識を把握・吸収していたのかを、同時代に著された比較的大きな影響を与えた書物との比較を通して多少の検討を行った。

『万国地理』の上巻では、彼は人類を五つの人種に分け、人間社会の等級を三つの段階に分類した。そして中国人は黄色人に属し、その黄色人のほとんどは半文明の段階にあると説明した。また国の政体を論じ、専制をアジアの特徴のひとつとして挙げたが、そもそもアジアの特徴というのは、新しいことをせず昔のままであろうとする点にあると見做した。一方ヨーロッパについてはアジアとの対比も含めながら、技術や製造を重視し、常に革新しようとしたために国は富み、政治に関しても専制から共和制や立憲制という進んだ文明段階に到達したと、フランスや日本などを例に、アジアとは対照的にヨーロッパを描写した。そしてなによりも注目すべきは、それらの世界描写・理解を、一切の疑いなしに、全面的に受け入れていた点である。

彼の『万国地理』は箇条書きに近い方法で各項目が書かれ、それぞれを詳細に記述していたわけではなかった。しかしそれでも中国を世界の中の一國として相対化し、ヨーロッパに及ばない半文明の国と位置付けたのち、遅れている証拠として政体を取り上げたことで、彼は読者が無自覚に抱いていたと考えられる中国中心的な世界観を壊そうとした意図があったことが読

み取れた。

この地理教科書がなにを参考にして書いたのかは未詳である。沈寂氏は亦楽書院の教科書を編訳したものであるとしているが、その根拠を明らかにしていない<sup>62)</sup>。しかし少なくとも康梁派を支持し、機会さえあればすぐに日本へ留学した彼の周りには、本書の内容に関わる情報が中国国内に限っても少なからず存在し、加えて義和団の乱による西学の肅清と清朝の失策による北京陥落を見聞した直後に日本へ留学した彼には、日中両言語から自由に西洋の情報を入手できる環境と機会があった。本稿では当時日本にいた梁啓超の言説に注目したが、多くの先行研究で分析されている通り、彼は日本で西洋知識情報を拡充させた。しかし梁啓超には世界地理に関する专著はなく、また1902年より前に中国で出版された地理の訳著や教科書がまだ少なかったことも踏まえれば<sup>63)</sup>、日本の思想潮流や地理書の方がよりいっそう陳独秀の地理教科書に与えた影響は大きかったであろう。

ヨーロッパの地理学はもともと「宇宙誌」(cosmography)と呼ばれ、大航海時代には航海に必要な知識である天文学、地図学、地誌、博物学などを総合した学問であった。18世紀のいわゆる「啓蒙の時代」になると、非ヨーロッパの地域に関する人種、文化、習俗などの知が蓄積され、ドイツ観念論的な自然哲学・歴史主義が登場し、19世紀にはダーウィン(Charles Robert Darwin, 1809-1882)の進化論とそれに続くスペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)の社会進化論が一世を風靡した。この背景の中で、地理学は歴史観や進歩観、文明観などと結合し、ヨーロッパの先進性を前提とした世界各国の啓蒙の度合いや歴史の発展段階などを基準とした世界観が描かれるようになった<sup>64)</sup>。

福沢諭吉(1834-1901)や田口卯吉(1855-1905)らを代表とする1877(明治10)年代の「文明史ブーム」は、風土などの自然条件を重視する進歩史観に基づいたギゾー(Francois Pierre Guillaume Guizot, 1787-1874)の『ヨーロッパ文明史』やバックル(Henry Thomas Buckle, 1821-1862)の『イギリス文明史』などの影響を強く受けたものであった。日本の西洋化を推進した人々によって、ヨーロッパ中心的な価値観が加わった人類や社会に関する地理学が、自明の理として紹介されたのである。そして現に来日後の梁啓超はその影響を正面から受けたのであった<sup>65)</sup>。

陳独秀の地理教科書の中で地理学を天文学、自然地理学、人文地理学の三つに分けた点は、明治初期に出版された福沢諭吉の『世界国尽』(1869)や内田正雄の『輿地誌略』などと同じだった。また彼の人種や人間社会の分類や等級分け、世界の大勢を把握する際の視座は、ヨーロ

62) 沈寂「陳独秀と商務印書館」『編輯学刊』(上海市編輯学会、1996年4月)参照。

63) 鄒(2000)p.417-419参照。

64) 野間三郎『地理学のあゆみ』(古今書院、1978年5月)p.112-114, 128-131参照。

65) 石川禎浩「近代東アジア“文明圏”の成立とその共通言語——梁啓超における「人種」を中心に」狭間直樹編『西洋近代文明と中華世界』(京都大学学術出版会、2001年2月)、石川禎浩「梁啓超と文明の視座」狭間直樹編『梁啓超——西洋近代思想受容と明治日本』(みすず書房、1999年11月)など参照。

ッパの思想や学問を中心に据えてはいたものの、1900年代の梁啓超と同じく、日本の思潮の影響を強く受けて受容された西洋学問・思想であり、彼がヨーロッパとアジアの間に歴然と存在した力の差を理解し、その理由を納得するための基本的な世界理解だった。

青年陳独秀が地理に関心を示していた証拠は『万国地理』だけに止まらない。1897年冬に書かれた『揚子江形勢論略』は中国国内の地理を紹介し、各要所の重要性を主張したものであった。また1904年に刊行した安徽省初の白話文雑誌『安徽俗話報』では、世界と自国の状況を知ることの重要性を主張し<sup>66)</sup>、地理教科書の内容をさらに簡略化した地理知識の紹介を行った<sup>67)</sup>。そして青年期に吸収・把握した地理知識と世界理解は、のちの彼の文筆活動や啓蒙活動において活用・発展していくことになる。

彼の日本留学は訳書彙編社との関係があったためだと考えられている点は最初に述べたが、当時の訳書彙編社はモンテスキュー（Charles-Louis de Montesquieu, 1689-1755）の『万法精義』やルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778）の『民約論』、ミル（John Stuart Mill, 1806-1873）の『自由原論』などの西洋思想を中心に翻訳出版した。しかし彼はその流れには乗らずに地理の教科書を著した。のちの彼は個人の自覚心や、政治改革のための思想改革などを主張し、雑誌や教育による啓蒙活動に従事していくが、世界認識の転換と救国意識の醸成という目的をもった地理知識の普及を選択したことは、彼が青年期から制度的な変革よりも、草の根の変革を重視していたことの表れである。

青年期の世界知識の把握と壮年期の言説に関する重要なポイントとして、『新青年』以降、彼が世界を東西に二分して議論した点を特に挙げることができる。

彼は『万国地理』の上巻で、まずアジア、ヨーロッパの順に書いたことから、中国が属するアジアと、目の前の相手であったヨーロッパの紹介・比較を優先していたことが分かるが、それでも下巻でアフリカやオーストラリアなどの国々について、その一国一国を紹介しようとした。だが同時に棕・黒・紅種人を野蛮と決めつけていた点は、その後『安徽俗話報』で、「全地球で黄・白兩人種だけが国家を建設でき、黒・銅・紅人種はすべて白人種の奴隷である」<sup>68)</sup>と論じられ、最終的にこの三つの人種が切り捨てられる形でヨーロッパ（白人）とアジア（黄色人）という非常に単純な二項対立論を彼は思考のベースにしたのである。

『新青年』第一巻第一号の巻頭論文で、彼は「自主的であれ、奴隷的であるな」、「進歩的であれ、保守的であるな」、「進取的であれ、退隱的であるな」、「世界的であれ、鎖国的であるな」、「実利的であれ、虚文的であるな」、「科学的であれ、想像的であるな」という有名な六つの条項

66) 三愛（陳独秀）「説国家」『安徽俗話報』5、1904年5月1日。

67) 『安徽俗話報』第3期以降、「地理略」に随時掲載。

68) 三愛（陳独秀）「地理略」『安徽俗話報』3、1904年4月1日。以下原文：  
「全地球上 只有黃白兩種人 能建設國家 黑銅紅三種人 都是白種人的奴隸」。

をたて、前項をヨーロッパ的なもの、後項を中国的なものとした<sup>69)</sup>。その数ヶ月後には、「世界に民族は多く、人種で言うならば、簡略に分けて黄と白であり、地理的に言うならば、簡略に分けて東西の両洋である。東西洋の民族は同じではなく、根本の思想もそれぞれひとつの系列を成しており、まるで南北は相並ばず、水と火は相容れないようである」<sup>70)</sup>と述べたあと、「西洋民族は戦争を以って本位と為し、東洋民族は安息を以って本位と為す」、「西洋民族は個人を以って本位と為し、東洋民族は家族を以って本位と為す」、「西洋民族は法治と実利を以って本位と為し、東洋民族は感情と虚文を以って本位と為す」という三つの条項を東西の差として挙げた。これら東西に対するイメージと描写は、『万国地理』で描かれたヨーロッパとアジア像と比較すれば、ほとんど変化していないことは明らかである。

また『新青年』第三卷第二号では、ロシア二月革命について紹介しており、「ロシアの革命は、ロシア皇帝を革めただけでなく、すなわち世界の君主主義・侵略主義を革めたのであり、私はその成功を祝す」<sup>71)</sup>と述べ、この世界の流れに乗って中国も君主主義・侵略主義のドイツに宣戦布告すべきだと主張した。専制政治で平民を抑圧する政策が行われているロシアで反政府運動が行われていることを青年期の陳独秀は知っており、しかも人類の進歩という視点からロシアの専制政治は倒されると見込んでいた。二月革命の成功は、彼が青年期に培ったその認識が正しかったことを証明したのであり、また第三卷第三号出版当時においては、北洋政府を主体とした当時の中国の政治は人類の発達の法則上「革め」られて当然だという確信を強めたことであろう。

確かに『万国地理』の内容には不正確な記述があり、加えてヨーロッパを中心とした色眼鏡による決め付けもなされた。しかしその認識は彼に危機意識を抱かせるのに十分な世界情報を提供し、彼の救国意識を常に再生産し続けた。その背後には、明治期における日本の思想や学問潮流だけではなく、日本というフィルターを通して西洋にアクセスしようとした清末の思想潮流が深く関わっていたのであり、青年陳独秀もその例外ではなかった。

#### 図版

図1：「大学数字図書館国際合作計画」（中国語サイト）

<http://www.cadal.zju.edu.cn/Index.action> より

図2：任建樹『陳独秀大伝』（上海人民出版社、2012年2月）p.60より

69) 陳独秀「敬告青年」『新青年』第一卷第一号、1915年9月15日。

70) 陳独秀「東西民族根本思想之差異」『新青年』第一卷第四号、1915年12月15日。以下原文：「世界民族多矣：以人種言，略分黃白；以地理言，略分東西洋。東西洋民族不同，而根本思想亦各成一系，若南北之不相容也。」

71) 陳独秀「俄羅斯革命與我國民之覺悟」『新青年』第三卷第二号、1917年4月1日。以下原文：「俄羅斯之革命，非徒革俄國皇室之命，乃以革世界君主主義侵略主義之命也。吾祝其成功。」